

平成 29 年 安孫子賞

(昭和 35 年創設 第 58 回)

水崎 勝秀 殿 (中札内村、先端機械導入型省力酪農経営)

平成 4 年に経営移譲。昭和 59 年以降、中札内村酪農ヘルパー利用組合取締役、中島機械センター取締役を歴任。平成 14 年、北海道指導農業士に認定。平成 20 年～同 26 年には JA 中札内村酪農事業部会長、平成 26 年から JA 中札内村理事に就任。

先端的な省力酪農経営に手腕を発揮した表彰に値する具体的な業績は次の通りである。

(1) 地域酪農の振興に貢献

酪農は、JA 中札内村の生産額の約 4 割を占め、水崎氏は、JA の重要な事業運営組織である酪農事業部会の部会長として、また、早くから、関係組織のリーダーを努めるなど、地域の酪農振興に尽力するのみならず、JA の理事としても組織を指導している。

地域の酪農が抱える課題(ポジティブリストの適正管理、乳質改善、自給飼料の生産体制確立、疾病・防疫対策、消費拡大)を解決するため、酪農家の意見を集約し、JA の事業推進に向けた繋ぎの役割を果たし、部会長在任期間中に長年の悲願であった JA 中札内村の年間生乳出荷乳量 40,000t の達成に大きく貢献した。加えて、乳量や乳質の個人情報公開し、全戸で共有するなどの先進的な取り組みを主導して、地域全体のさらなる生乳生産や良質乳生産の向上に寄与している。

(2) 安定した経営システムの確立

酪農経営では、全頭、自家繁殖と自家育成により、牛群改良に取り組み、共進会に積極的に出品し、体型と能力を兼ね備え、長命連産かつバラツキの少ない牛群を造成している。

牧草 (23ha)、飼料用とうもろこし (28ha) は、生産・サイレージ調製をコントラクターに外部委託して、適期収穫により高品質の自給飼料を確保し、生産コストも低く抑えている。また、中札内村飼料組合から農場に合った指定配合飼料を購入し、TMR として給与している。

牛舎施設はフリーストール牛舎 (ロボット搾乳用、乾乳前期用)、フリーバーン牛舎 (哺育用、育成牛用)、タイストール牛舎 (搾乳牛用、乾乳後期用) を建設し、子牛→育成牛→初妊牛→搾乳牛→乾乳牛の全てが農場内で効率よく管理できるシステムを確立している。

毎日の牛群管理では作業の 3C、「Consistency (一貫性)」、「Continuity (継続性)」、「Comfort (快適性)」に取り組んでいる。泌乳牛は搾乳ロボットで搾乳するだけでなく、パソコン管理で得られる個体情報と積極的な姿勢で観察し、起立不能などのトラブル、乳質モニタリングによる乳房炎等疾病の早期発見、子牛は群飼養でも哺乳ロボットで個体毎の哺乳状況や健康状態を把握している。

地域に先駆け、平成 17 年に哺乳ロボット、搾乳ロボット、自動エサ押し機械を導入し、搾乳ロボットの多回搾乳により個体乳量も増加しており、現在、労働力 2.5 人で乳牛飼養頭数 218 頭 (経産牛は 118 頭) を管理し、毎年、経産牛一頭当たり乳量 10,000kg 以上、体細胞数 200,000 以下/ml、平均産次 3.産以上で、年間出荷乳量 1,100 トン以上の成績を達成できるシステムを構築している。

(3) 自動化・省力化技術の導入・波及と若手酪農家の育成

自動化・省力化技術の導入により、経産牛 1 頭当たりや生乳 10t 当たりの労働時間は、北海道平均よりもかなり少なく、自由な時間と精神的ゆとりを創出している。

自動化・省力化技術は地域酪農家の成功事例となり、技術の導入を検討している酪農家に対し、自分の経験をもとに親身に相談、具体策を助言し、数戸の酪農家へと波及した。

指導農業士として研修生に対する積極的な指導支援するとともに、酪農家戸数の減少は地域の衰

退に繋がることから、地域の若手酪農家に積極的に出向き、担い手の人材育成に尽力し、地域農業の活性化に大きく貢献し、非常に人望が厚い。